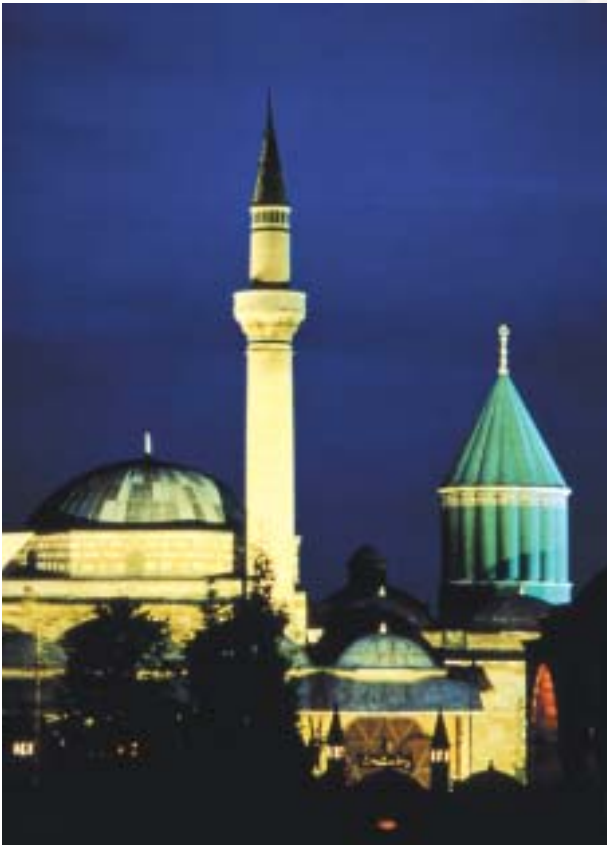


ターコイズ・ブルーと 銅の神秘

翻訳・著述・編集 井上 真希



*ライトアップされたメヴラーナ・ジェラーレディン・ルーミーの霊廟。16の面をもつ筒と円錐からなる屋根は目も覚めるようなターコイズ・ブルーのタイルで覆われている。



右:メヴラーナ博物館前で入手したトルコ石のネックレス。くもの巣状の黒色の脈を含む深い空色の石が連ねられている。左:イスタンブールのグランドバザールで購入したイズニック・ブルーの小鉢。

見ているだけで吸い込まれそうな青 というのがある。人が青にひきつけられるのは、あらゆる生命を育んできた海の色、宇宙へと広がり、天国のイメージも重ねられる空の色だからではないかと言われ、太古の昔から、そのスビリチュアルな魅力あふれる 青 を手元に置いたり身につけたりすると幸福に恵まれると考えられていたようだ。

古代エジプトやインカ帝国の時代から珍重されてきた天然石のひとつがトルコ石(ターコイズ)だ。化学組成は含水銅・アルミニウム・燐酸塩。含まれる鉱物のバランスによつて、鮮やかな空の青色から緑色まで色調に幅が出る。青は銅による発色で、銅の含有量が多いほど青が濃くなり、アルミニウムが多かったり鉄が混じったりすると緑になるのだという。主にペルシアのホラーサーン地方(今のイラン東部からアフガニスタン北西部)で深い空色のもの、エジプトのシナイ半島で緑味のもので産し、後にそれをトルコの隊商がヨーロッパへ持ち込んだことから、トルコ石と呼ばれるようになった。そこからターコイズ・ブルー という色の名前も生まれたというわけだ。

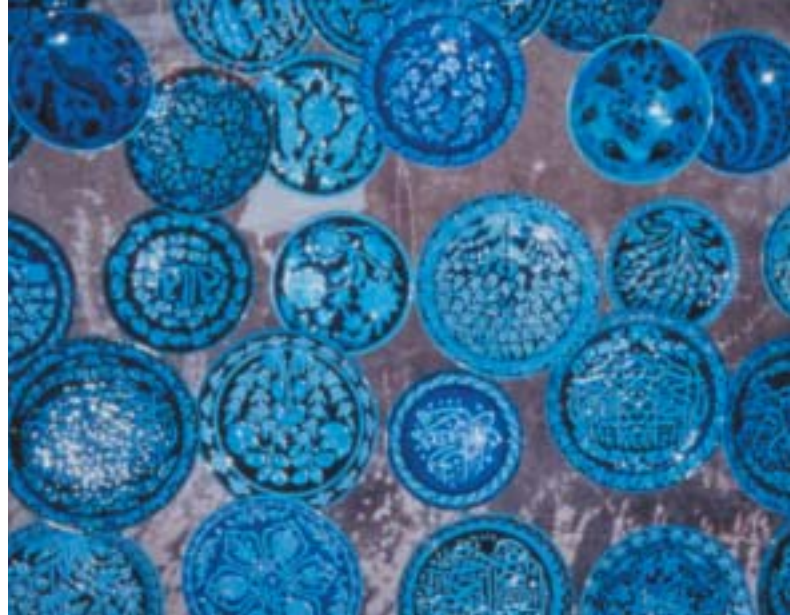
十年前の初夏、旅先でトルコ石の数珠のようなネックレスを手に入れた。トルコの高原地帯アナトリアの古都、コンヤでのことだ。

十一世紀後半にペルシアの地を中心に成立したセルジューク・トルコ帝国が小アジアへと西進し、分家のルーム・セルジューク王国が首都に定めたのがコンヤ。十三世紀、この町に移り住んだ神学者メヴラーナ・ジェラーレディン・ルーミーはイスラム神秘主義(スーフィズム)の教えを広めた。彼に始まるメヴラーナ教団の修道僧たちの両腕を水平に広げてくるくる回る旋舞の儀式はつとに知られている。

現在はメヴラーナ博物館として一般公開されているルーミーの霊廟にたどり着くと、各国の巡礼者(イスラム教徒)と観光客(非イスラム教徒)が入りまじって長蛇の列をなしていた。最後尾にいた私のところへひとりのおじいさんが近づいてきて、金銀のネックレスを数本、顔の前にかざし、片言の英語で「買ってくれ」と言う。即座に断った



トプカプ宮殿内の金角湾を見晴らすあずまや、バグダッド・キョシュキユ(1639)。壁も天井もイズニック・タイルで埋めつくされている。



*キユタフヤの窯で焼かれたさまざまな文様の青い陶器。



ターコイズ・ブルーを基調としたモザイク・タイル。陶器博物館となったピユク・カラタイ神学校(コンヤ)の展示品(絵葉書)。図柄からみてずいぶん古いものようだ。



カッパドキア地方ウチヒサルルの奇岩に穴を穿った家を訪ねた。ご主人の服の色は偶然にもターコイズ系、筆者は入手したばかりのトルコ石をつけている。



*銅製品も陶器や絨毯などと並ぶトルコの名産品のひとつ。次の旅ではとびきりの品を探してみたい。

が、彼の首に鮮やかな空色の石が連なうた数珠のようなものがかかっているのに気づいた。「あなたがつけているのなら買いたい」と英語に身振り手ぶりで伝えたところ、おじいさんはしばし考え込んだあと、おもむろに首のものを外した。「これはいいものなんだ、普通は売らないんだ」と目配せしながら。

そのとき衝動的にそれがほしくなったのは、そびえ立つメヴラーナの霊廟の塔屋がターコイズブルーに輝いていたからだ。その色に呼ばれているような気がしたのである。びっしり張られた施釉陶器(ファイアンス)のタイルは、神々しいまでの蒼穹の色をしていた。

陶芸を嗜まれる方ならよくご存じだろうが、陶器の彩色には、発色剤としてさまざまな鉱物を加えた釉薬が使われる。ターコイズブルーのトルコ青は、緑の織部や赤の辰砂(しんしゃ)同様、銅を用いた代表的な釉である。エジプトでは紀元前四〇〇〇年頃、この青い釉を滑石(かつせき)にかけて焼き、トルコ石のように加工して装身具や副葬品に使っていたというし、陶器としては、紀元前二六五〇年頃に造られた階段ピラミッドの地下からファイアンスタイルが発見されている。銅釉のトルコ青は人類最古の釉薬に数えられるのだ。

トルコにはペルシアから入ってきた彩釉陶器の伝統が息づいている。セルジューク期のモザイク・タ

イルの見事さもさることながら、世界的に名高いのが、十五世紀以降のオスマン朝時代に発展したイズニック窯である。ビザンチン帝国の首都コンスタンティノブルを陥落させ、イスタンブールと名づけた新しい都に、オスマン・トルコ帝国の歴代のスルタンは、偶像崇拜を禁ずるイスラムの教えに則った幾何学模様や草花文様のタイルで装飾した数々の壮麗な建築を出現させた。

コンヤですっかりタイルに魅せられた私は、イスタンブールで、トプカプ宮殿や、ブルー・モスクの別名をもつスルタン・アフメット・ジャミイなどの内部を飾る水仙やバラ、チューリップといった花や植物の文様のイズニック・タイルを見て回った。絵付けの技術によって文様はモザイクよりもさらに精緻になり、イズニックの窯元の職人たちは「トマト赤」と呼ばれる独自の紅色をも生み出していた。その後、生産の中心地はキユタフヤの町に移ったそうだが、イズニック・ブルーを基調とする陶器があちこちの店先に並んでいた。

おじいさんから譲ってもらったトルコ石の縁なのか、いま私はオスマン・トルコ末期のスルタンの孫ケニゼ・ムラト氏の自伝的小説『パダルブルの庭』を翻訳中である。古来より旅人を守る石、転じて人生という旅の成功を象徴するようになったトルコ石には、やはり不思議な力があるのかもしれない。

井上 真希(いのうえ・まき) 略歴 翻訳・著述・編集



1960年、北海道生まれ。早稲田大学第一文学部人文専攻卒業。複合文化施設勤務を経て独立。フランス語書籍の翻訳、各種のメディアへの寄稿の傍ら、書籍・雑誌の企画・編集に携わる。訳書に『ジャンポール・ゴルチエの世界』(上野の森美術館)、『サムライ ジャン=ピエール・メルヴィルの映画人生』(晶文社)。映画情報サイト「シネマトレジャー」(<http://www.cine-tre.com/>)で新作映画のレビューを執筆、書籍や雑誌等でインタビュー取材や対談の構成を手がけ、編書は評論、ノンフィクション、エッセイ、対談集、コミックスなど多数。